



Title	自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究：中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として【論文内容及び審査の要旨】
Author(s)	王, 金偉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第12014号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60095
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Jinwei_Wang_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：王 金偉

学位論文題名

自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究 —中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として—

「負の遺産」とは、後生に伝えるべき自然的あるいは人的な災害の遺構や遺物であり、このことは今や広く認知されているが、近年、そうした「負の遺産」を資源として活用する方策の一つとして「負の遺産観光」が注目されるようになってきている。しかし、そこに内在する倫理的な問題をはじめ、その手法や効果についての研究蓄積は未だ少ない。本研究は、2008年中国四川省で発生した地震による自然災害地「北川地震遺跡区」を事例に取り上げ、「負の遺産観光」の実態を検証し、その成果と課題を述べ、「負の遺産」概念の再構築を行ったものである。そのうえで、こうした知見を他の自然災害地における「負の遺産観光」へ応用する際の課題の抽出を行った。

まず序章において、「負の遺産」に係る基礎理論を整理し、そのうえで各章において以下の4つの観点から分析を行った。第1章では、社会構築主義理論を援用し当該地が如何に「負の遺産」として構築されたかを述べ、第2章では、「北川地震遺跡区」におけるインタープリテーションの実態を観光客の意識の視点から解明し、手段・内容の違いからみたインタープリテーションに対する観光客の評価について述べた。第3章では、観光客の「負の遺産観光」に対する期待度と満足度について述べた。第4章では、「負の遺産観光」がもたらすインパクトの実態を地元住民と観光客の意識から分析した。第5章では、第1章から第4章までの考察をもとに、「負の遺産」と「負の遺産観光」のマネジメントにおいて重要とされる事項の特徴と課題を導き、そして、結章では、本論文の結論と今後の研究課題を示した。

結論の要点は、以下のとおりである。

第一に、「負の遺産」は以下の3つの含意を持つ。すなわち、一、「負の遺産」は「災害・被害の記憶を保持し嫌悪の感情を呼び覚ます存在」であると同時に「新たな生のために乗り越えるべき対象として顕れるもの」である。二、「負の遺産」は「そこで被害があった、あるいは被害が存続していることの表徴」であるが、それと同時に「被害の事実を共有・理解しよう／させようとする契機」となっている。三、「負の遺産」は「将来にわたって被害の事実を明示し続ける証」であるが、それと同時に「同様の被害を繰り返さないための教訓」でもある。自然災害地における「負の遺産」は上述のような重要な含意を持ち、「負の遺産観光」は、その意味を次世代へ継承する取り組みといえる。

第二に、自然災害地において「負の遺産」は、観光客、地元住民、地方政府、観光企業などのコア・ステークホルダーが主体となり、その相互関係の下で構築される。しかし被災地によ

っては、上記のような主体のいずれかが欠落したり、あるいは新たな主体が加わったりすることも予測されるため、「負の遺産観光」のマネジメントを考える際には、対象となる「負の遺産」に関わるステークホルダーをまずもって確認する必要がある。また「負の遺産」は、自然現象が生み出す要素に教育的、精神的、倫理的、政治的といったさまざまな要素が追加されながら構築されるが、それら追加される要素は観光の実態検証と地元住民や観光客の言説検証によって明らかにできる。ただし、追加される「負の遺産」の構成要素は、時として「負の遺産」の真正性を脅かす存在となる恐れがあり、「負の遺産」の保護の際にはその危険性を考慮しておくなければならない。

第三に、自然災害地における「負の遺産」のインタープリテーションは、観光客に対し、観光地の情報を提供したり「負の遺産」の価値や意味を理解させたりするだけではなく、遺産および環境の保護意識を植え付けることにも役に立つ。そして、そのインタープリテーションの手段と内容の設計は、遺産の発信効果や観光客の体験効果にとって重要である。その手段については、観光客は入手しやすく便利な手段を求める。またその内容については、「負の遺産」の状況のみならず、観光客が興味をもっている被災状況、復興状況、観光地の文化と自然環境、いのちの教育の情報などにも配慮する必要がある。

第四に、観光客満足度は、自然災害地における「負の遺産観光」のマネジメントにとって重要な指標である。研究結果によると、観光客がより重視しているのは観光施設やサービスではなく、遺産そのものの質とそれを享受するための環境の質である。また、観光客は現地のサービスや管理に対する容認と寛容の気持ちが一般的な観光地より強く、そのことが「負の遺産地」に対する満足度を高いものとしている。今後、一般的な観光形態と同様、「負の遺産観光」においても施設の設置やサービスの提供に当たっては、観光客の需要や要望に十分配慮して、観光客の希望するサービスを提供する一方、観光客の満足度が向上するよう務める必要がある。観光客満足度は観光客層の拡大やリピーターの醸成はもちろん、口コミによる新規観光客の獲得などの波及効果につながるからである。

第五に、自然災害地における「負の遺産観光」は、現地の経済、社会・文化および環境にプラス効果を生み出す一方で、多くのマイナス効果をも生み出す。観光客ばかりではなく地元住民もプラス効果を感じている点は重要である。しかし、地元住民が観光によって日常生活にもたらされる環境汚染やゴミ問題といった身近な問題により強い関心をもつのにに対し、観光客の印象に残るのは、観光客向けにつくられた、外観を重視した施設や整備された景観である。現地の「負の遺産観光」の持続可能な発展を実現するために、今後はさらに経済的インパクト、社会・文化的インパクトおよび環境的インパクトのマイナス効果を努めて抑制するとともに、プラス効果の増大を図る必要がある。また、地元住民の身近な利益の確保や、地元住民が観光産業にかかわる機会の拡大に努めるべきである。

第六に、自然災害地における「負の遺産観光」のマネジメントをしていく上での課題として、一、「負の遺産」の有形資産のほか、背後にある情報を保護し、真正性を維持すること、二、適切なインタープリテーションを整備し、「負の遺産」への理解を促すこと、三、観光満足度を高めるためには、観光客の体験効果や質に注目し、「負の遺産観光」に期待するものを踏まえた観光開発を進めること、四、地方政府や開発業者は被災地の地域社会の再生を第一の課題として取り組むこと、などが整理できる。

残された研究課題としては、地震以外の要因による「負の遺産」の事例研究にも取り組み、遺産や観光施設の整備の手法や観光地としてのマーケティング手法など、新たな視点も取り入れた総合的な考察を進めていく必要性をあげることができる。そうすることによって、本研究で得られた知見を、広く世界の自然災害による「負の遺産地」の観光マネジメントに共通して

応用できるものに発展させていく必要がある。

なお、この論文は2015年6月に学位申請論文として北海道大学に提出されたものである。